

去りゆく人が残すもの

すべてのいのちがつながっていくみ教え

●歌人・中城ふみ子

遺産なき母が唯一のものとして
残しゆく「死」を子らは受取れ

東京・杉並区に築地本願寺の墓所「和田堀廟所」があります。古賀政男や樋口一葉などの有名人の墓もあります。

先日、法話に招かれたおり、境内を散策していると、新しい区画の中に故渡辺淳一氏のお墓がありました。『失楽園』など有名な作家です。私は渡辺淳一氏の小説では『冬の火花』だけ読んだことがあります。

戦後の代表的な女性歌人・中城ふみ子(一九二二〜五四)を小説で書いたものです。冒頭の歌は、その中城ふみ子が詠んだものです。

北海道の帯広に生まれ、二十歳のときに鉄道技師と見合い結婚。三男一女を出産し、離婚。乳がんで片方の乳房を切除(一九五三年)、翌年に再発し、二月に肺臓への転移を宣告されました。そして八月三日に病死、三十一歳の若さでした。

亡くなった年に出版した、川端康成の序文を付けた処女歌集『乳房喪失』は、歌集としては異例のベストセラーとなっています。

渡辺淳一は、中城ふみ子が札幌医大病院で亡くなった時、その大学の医学部一年でした。中城ふみ子とは、直接には会っていま

せんが、「偶然先輩の医師を訪ねて放射線科の詰め所に行った時、暗い病棟と、その中で迫り来る死を待っている人々の群れを見た」と、当時、中城ふみ子が置かれていた現場を語っています。

魚店を営む両親、乳がんの治療、子育て・・・、子らに残す遺産はおそらく皆無であったことでしょう。冒頭の歌は、その遺産のない状況の中で、「命には終わりがあります。その終わりのある命を生きているのです」という事実を、自らの死をもって子らに残しておきますという歌です。

「死」は、去りゆく人が最後に残してくれる、大切な教えでもあります。

●お念仏になる

十年前に往生した父に、生前、「浄土へ行ったら何がしたいか」と聞いたことがあります。父は僧侶で、食道がんを患い、治療の見込みもない状態でした。

私がなぜそのような質問をしたかというところ、毎月、訪問する老人ホームで、こんなことがあったからです。

九十二歳の老夫婦が、いつもお訪ねすると、亡くなられたお父さんの悪口を言っています。あるとき、「Tさんも、この先、そう長い人生ではありません。お浄土へ行ったらお父さんがいるから、直接、なじったらいいですよ」と言っていると、寂しい顔をされました。

そのとき私は、「Tさんは、浄土で父に会うということが想像できないのだ」と思いました。見て聴いて知って、という自分の常識に納まることしか思えないんだ、そう思ったとき、私は、自分のいのちが終わった後、仏になって、二五〇〇年前の仏さまの教えを直接聞こう・・・と楽しんで、意外と自由にいった先のことを思うことができたのです。

そのような思いがあったので、父に「浄土へいったら何がしたいか」と聞いたのでした。そのとき父は、少し沈黙があつて「ん、南無阿弥陀仏の念仏になる」と言いました。父が、何を考え念仏になると言ったかは問いませんでした。しかし今、父から有り難い言葉をいただいたと思っています。

南無阿弥陀仏・・・と称える中に、このお念仏の心を教えて下さった親鸞聖人に出会うこともあります。また、南無阿弥陀仏・・・と念仏しながら、三十代で往生した浄土真宗の伝道に燃えていた友のことを思うこともあります。いま南無阿弥陀仏・・・と称えながら、この浄土真宗という教えにふれる環境に育んでくれた父のことを思っています。

私たち浄土真宗の者は、お浄土に至ってなき方々と出会うということも有り難いことですが、それ以上に、いまこうして南無阿弥陀仏・・・と称える中に先に行かれた方々とふれ合っていける。これがなんとも有り難いことです。

中城ふみ子は「遺産なき母が唯一のものとして残してゆく「死」を子らは受取れ」と詠みました。

私の父は「父が唯一のものとして残しゆく「南無阿弥陀仏」を子らは受取れ」と残してくれたようです。父とのご縁が念仏で結ばれている。父だけではない、すべてのいのちとつながっていけるみ教えが浄土真宗という仏道です。



本願寺新報
みんなの法話
より